

## 令和二年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

□ 次の文章を読んであとの問いに答えよ。

A C (作題者注 アダルト・チルドレン) とは、虐待などのさまざまな心的外傷体験から「自己の正当な欲求を正當に表出できなくなった人」を指す言葉だ。その結果「自分が好きになれない」「プライドが持てない」「感情がコントロールできない」といった問題が生じ、さらには嗜癖や摂食障害などの原因にもなりうる」とされている。彼らは自分が引き受けるべき責任の範囲を理解できない。その結果しばしば生ずるのは「すべてを自己責任として引き受ける」という態度である。具体的には、親から虐待されて育った子供が、その当の親をかばったり奉仕したりするような態度をとることがある。すべてを自己責任として引き受けることは現実的には不可能であり、(1) それゆえその種の「責任」は決して全うされない。その意味で、このような態度は、むしろ責任回避に繋がるものであり、その人のその後の生き方のパターンとなつて、さまざまな嗜癖や葛藤の原因となる。A C の概念は、患者のこうした責任回避のパターンに気づかせ、認識や行動を改善させるうえで役に立つ。たとえば幼児期に虐待を受けたようなケースなどでは、まず虐待を受けたことに本人は責任がなく、□ I が責任を負うべきであることが十分に理解されなければならないのだ。

このようにA C 概念は、その応用の方法と対象を限定しさえすれば、それなりの有効性とインパクトを(a) 發揮しうるものだ。しかし残念なことに、日本におけるA C 概念は、まず「ブーム」として消費されてしまった。学問的受容が十分になされないうちに、それこそポップ・サイロロジー(注1)の一変種として、大衆的に受容され過ぎてしまったのである。もっともA C とは本来、既成の精神医療に對抗する医療消費者運動として発展した経緯があるそうなので、その意味では必ずしも間違つた受容とはいえないのかもしれない。ただ、専門家としてはひとり齋藤学氏のみが紹介者の立場を担い続けたため、あたかも齋藤氏を教祖とするカルト・ムーブメントであるかのような、きわめて(b) 浅薄な誤解がなされてしまった。齋藤氏を直接に知るものとしては、氏の誠実さと熱意とが裏目に出たようで残念でならない。実はA C 概念を臨床的に評価している精神科医は結構いるのだが、その□ II はあまりにも知られていないのだ。こうしたアンバランスも、A C の受容における不幸の一つだった。

近年の「ひきこもり」「ブーム」にしてもそうだが、なんであれブーム的な流行現象には、その副作用として問題もはらまれることになる。もちろん「A C 概念」そのものにも、さまざまな問題がある。□ A、A C なる言葉が診断概念なのか状態像なのか人格類型なのか、今一つはつきりしないこと。境界例や摂食障害などの「原因」となる、というのが事実であるとすれば、これは言うなれば(2) メタ診断とも

## 令和二年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

言うべき抽象的概念であり、ふつうの精神科医はまずここで挫折するだろう。さらに言えば、ACであることがもたらす病理が、あまりにも広く多様すぎるのではないか。あたかも **Q** 一つで何でも説明が出来てしまう感があり、こういった **III** 性は、それだけでうさんくさいものと見られてしまう結果につながる。そして、最大の問題は、ブームとともに **(3)** 雲霧のごとく発生した「自称AC」の集団である。現在の自分の問題は、すべて過去に親からこうむったトラウマに原因があると彼らは主張する。それが甘えであり幻想であり、あるいは単なる責任転嫁でありうるとしても、僕はそこを批判するつもりはない。**(4)** 問題はここでも「語り方」なのだ。そう、彼らは自らのトラウマを、いささか **(c)** 声高に語りすぎたのではないか。そうすることによってAC概念そのものが、あたかも責任転嫁の論理であるかのような誤解と嫌悪感が育まれた可能性はないか。いずれにしても、彼らの「トラウマ語り」がはらむ本質的な問題を考えるには、いったんフロイトまで **(d)** 遡ってみる必要があるだろう。

心に問題が起こる経路には、いくつかの種類がある。精神医学はそれを大きく三つに分類する。すなわち、器質因、内因、心因である。ごく単純な見取りとして、僕がよく採用する喩えは、心をコンピュータになぞらえることだ。器質因は脳のハードウェアにおける実質的なトラブルである。コンピュータではハードディスクや基盤の破損がこれにあたる。内因の位置づけはやや困難ではあるが、さしあたりはOS（オペレーティング・システム）のトラブルになぞらえることができるだろう。OSはコンピュータにおける最も基本的なソフトウェアではあるが、ハードの制約を受ける点から **Q** ともつながりを持つている。

いまの精神医学は、ほぼ生物学的な視点が **(e)** 席巻しており、したがって心についても、ハード主体のとらえ方になっている。**B**、そんな中で、いまだ頑固に心因論の領域だけを語り続けようとする分野が存在する。それが「精神分析」だ。二十世紀は「精神分析の世紀」だったと言われる。**C**、精神分析由来の「トラウマ」なんて言葉が日常語になるのも、当然といえば当然なのかもしれない。ただ不思議なのは、臨床の現場で、精神分析はとうに無効を宣告されているというのに、僕らがどうしても、この言葉を捨てられないという事実のほうだ。

「トラウマ」の語源はギリシャ語だ。誰が言い出したか、十二支の寅午から来たとかいう俗説を信じてはいけない。もともとは外科学などで、肉体の **IV** を意味する言葉だった。ここには「激しいショック」「防壁の破壊」「人体全体へ及ぼす影響」などの意味が込められている。その後どんどん、心的な外傷を意味する使い方が一般化して、いまや「トラウマ」が心の傷という意味以外に使われることはほとんどない。

## 令和二年度 一般入学試験問題「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

心的外傷論は、しばしば信じられているようにフロイトが始祖ではなく、ほぼ同時代に活躍したフランスの精神科医ピエール・ジャネである。彼の師であったシャルコーは、多くのヒステリー患者の治療を手がけていたが、その中に鉄道事故による鉄道脊椎症の患者が多かった。ジャネは彼らの症状を、神経系の異常ではなく、**V**な問題として理解しようとしたのである。その源流には、メスメリズム(注2)にはじまる多くの催眠術師達の治療記録があった。ちなみにジャネは「解離」現象を最初に提唱したひととしても知られており、一九七〇年代以降、多重人格のブームとともに北米を中心に再評価の機運が高まりつつある。**D**「パトナムによれば、ジャネの時代にも多重人格の存在を疑問視する声はあり、その批判の論法は、現代のそれとほとんど同じであるとのことである。

心がショックやストレスを受けると、トラウマを生ずるということ。トラウマはずっと心の中に居座って、さまざまな症状や記憶として、繰り返し現れてくるということ。幼児期のトラウマは、言ってみれば時限爆弾のようなものだ。はじめは潜在していて、思春期以降のある時点で、ある出来事をきっかけにして「爆発」(＝発症)する。こういう発想そのものは、実はけっこう新しい。せいぜい精神分析以降のものだ。**VI**の誕生とともに「ヒステリー」や「神経症」が発見されて、こうした心的因果論が盛んになった。ここで心的因果論の歴史とかを詳しく論ずる余裕はないので、これ以上の深入りはやめておこう。

ただし、(5) 忘れてほしくないのは、トラウマの効果は常に予測不可能であること。ある経験がその人にとってトラウマであるか否かは、病気が発症してみないとわからない。さらに言えば、何がトラウマになっているかは、本人自身にもわからない。それは精神分析の営みの中でしか、本来みえてこないものなのだ。

注1 ポップ・サイコロジィ…大衆向け心理学

注2 メスメリズム…オーストリアの医師・メスメルが考案した動物磁気を使う治療法。催眠状態になった。

(出典：斎藤環『心理学化する社会』PHP研究所・二〇〇四 作題のため省略した箇所がある)

令和二年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意答えはすべて解答用紙に記入すること】

問一 傍線部(1) 「それゆえその種の「責任」は決して全うされない」とあるが、それはどういうことか。「その種の責任」の内容を具体的に示しながら説明せよ。

問二 空欄 I ~ VI に入れるのに最も適当な語を、次の(ア) ~ (エ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- 空欄 I (ア) 環境 (イ) 親 (ウ) 社会 (エ) 医師
- 空欄 II (ア) 実践 (イ) 研究 (ウ) 論証 (エ) 受容
- 空欄 III (ア) 利便 (イ) 実用 (ウ) 多様 (エ) 万能
- 空欄 IV (ア) 破壊 (イ) 異常 (ウ) 損傷 (エ) 危機
- 空欄 V (ア) 心的 (イ) 内在的 (ウ) 本質的 (エ) 基礎的
- 空欄 VI (ア) 多重人格 (イ) フロイト (ウ) 精神分析 (エ) ト라우マ

問三 波線部(a) ~ (e)の語の読みを記せ。

問四 空欄 A ~ D を補うのに最も適当な語を、次の(ア) ~ (オ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- (ア) ます (イ) おそらく (ウ) しかし (エ) なお (オ) だから

問五 空欄 a ~ e に入る言葉を、それぞれ本文中から抜き出せ。

問六 傍線部(2) 「メタ」、(3) 「雲霞のごとく」の意味として相応しいものを、次の(ア) ~ (エ)の中からそれぞれ一つ選んで符号で書け。

- 傍線部(2) (ア) 根源的な (イ) 高次な (ウ) 最善な (エ) 超絶な
- 傍線部(3) (ア) そろいもそろって (イ) 一人残らず (ウ) 息もつかせず (エ) 非常にたくさん

問七 傍線部(4) 「問題はここでも「語り方」なのだ」とあるが、筆者はなぜ「語り方」に問題があると考えているのか。簡潔に説明せよ。

問八 傍線部(5) 「忘れてはしくないのは、トラウマの効果は常に予測不可能であること」とあるが、それはどういうことか。簡潔に説明せよ。

受験番号

広島市立看護専門学校 第一看護学科 5-5

令和二年度 一般入学試験問題 「国語」

【試験上の注意: 答えはすべて解答用紙に記入すること】

二 次の文章にある傍線部のカタカナ表記を、漢字に改めよ。

こちらの問題は、著作物使用許諾が得られていないため、  
公開できません。